

1-5 カムイユカラ「フム パクパク」解説

語り手：貝澤とうるしの

聞き手：萱野茂

貝澤：esikarun せば uepeker なんぼも〔思い出せば昔話いくらでも〕あるんだ。

萱野：私は雷でありました。沙流川の古いい名は **Sisirmuka** と言いますが、その **Sisirmuka** は非常にその柳のいいところで、その柳を切ってイナウを作る御幣ですね、イナウを作るべく、その沙流川の方へやってきたら、村の若者たちは、昔からアイヌの言い伝えで、雷のなる時には、研ぎものをしてはいかん、あるいはその **itese**〔編む〕という、ごぎを織ったりそういう仕事をせずに、こうかしこまっているようにと言うのが、昔からのアイヌの風習なんです、そういう風なことを聞いて知っている若者は、「神様だからとて、働かないの？ 神様だからと言って、研ぎものはしないの？ 神様だからとて稗を搗いたり、粟を搗いたりしないのかい？」と言いながら、私の音を聞いていながらも、遠慮もせずに、研ぎものをしたり、あるいは、搗き物をしたりしたので、私は、私の乗っておる **sinta**〔ゆりかご〕、いわゆるアイヌの考え方として、この雷というのは、いわゆる龍だと考えておるんですね。その龍自身の乗っておるその乗り物の **sinta pake sinta kese a=kik a=kik** というのは、乗り物の前の方を、後ろの方をたたくと、前の方から石の滝が落ち、後ろの方からは、あの一**suma rayoci**〔石の虹〕と **usat rayoci**〔燠の虹〕？

貝澤：**suma rayoci usat rayoci a=raokuta**〔石の虹、燠の虹を私は下に落とした〕。

萱野：その、前の方からは石のたきを、石の虹を落とし、後ろの方からは火の虹を落とし、火の滝を落とすようにして、アイヌの村を全滅させてしまったと。だけれども、今の雷よ、そんな風にして、村の上を通過して、村の若者たちがそういう風にしたからと言って、短腹を起こして〔痲癩を起して〕、村を痛めつけてはいけませんよ。と、一人の雷が言ったと。

その時の、いわゆる天から降ってきた石があるのは、今の平取町内の岩

知志（いわちし）付近か？

貝澤：岩知志。

萱野：岩知志とかそれから、池売（いけうり）の辺りまでな？

貝澤：イケウレリ。

萱野：イケウレリで言うんだったな、あすこは。

貝澤：イケウレリやら岩知志まで、ずっとあるもの。

萱野：そうだ、ずっと平らに堤防の上に、石がゴロンゴロンゴロンある。
それは雷から落とされたものだ。と、まあ、伝説をも交えた、これは
kamuyyukar [神謡]。sakehe というんですね、この hum pakpak という。

貝澤：hum pakpak というのは sakehe [リフレイン]。

萱野：hum pak pak というのは sakehe と言って、繰り返し、繰り返しそれを
言いながら、間へいろいろな言葉を入れていくんですね。これは
kamuyyukar [神謡] と言います。

貝澤：hum pak pak ya... yan atpake hum pak pak [フムパクパク 上陸した
最初は フムパクパク]